

海上を飛び交う不吉な鳥たち —『白鯨』を鳥から読む

廣野 允紀

[要約]

本稿は、ハーマン・メルヴィル (Herman Melville) による『白鯨』(*Moby-Dick*) (1851) の中で描かれる鳥に注目し、その役割を考察するものである。この作品内の鳥が描かれる場面を考察すると、鳥には不穏な雰囲気や不吉な予兆がつきまとう。特に、白く美しいアルバトロスは本来吉兆を示す鳥であるが、『白鯨』においては死や恐怖の表象として描かれている。不吉で陰鬱な雰囲気の中で飛び交う鳥たちは、白鯨との闘いの中でピークオッド号に襲い掛っていく。さらに物語が進むにつれて、鳥のイメージはピークオッド号の船員たちに重ねられる。イシュメールは鳥のように「止まり木 (perch)」から、不気味な船アルバトロス号を見下ろす。また白鯨との闘いに興奮したエイハブは、鳥のような声を出し、「止まり木 (perch)」に登っていく。ついにはピークオッド号の船自体がアルバトロスに喩えられ、白鯨を追跡する。最後の場面で沈みゆくピークオッド号は、先住民タシュテゴに打ち付けられた“sky-hawk”という鳥と共に海に消える。この小説の冒頭で、先住民の赤ん坊が鷲に連れ去られた伝説が語られるが、この物語自体も鳥が伴う伝説で始まり、鳥が伴う伝説で終わりを迎えるのである。『白鯨』の中で、多くの円環が存在するように、その円環の中に不吉な予兆を示す鳥たちも含まれていることを例証するのが、本稿の目的である。

はじめに

ジョージ・クラウバ (George Klauba) という画家がいる。彼は 2003 年ごろから、『白鯨』(Moby-Dick) の登場人物が鳥類化した作品を多く描いている。クラウバは冷戦期に三年間、海軍として海に出た。ロバート・K・ウォレス (Robert K. Wallace) によるインタビューで、彼はその時見た鯨について語っている。それは絵や漫画で見たものとは全く異なるものであり、その光景が彼の中に何かを閉じ込めたとクラウバは語る (Wallace 71)。その後、シカゴでグラフィックデザイナーとして約 30 年間働いた彼は、その仕事を失ったことをきっかけに、画家として活動していく。クラウバは、庭で出会った鳥や若き日に見た鯨との思い出から、『白鯨』と鳥の作品を制作する。クラウバは、幼少期から『白鯨』の漫画版を読み、その後小説の『白鯨』を何度も繰り返し読み込んだ (Wallace 73-74)。彼の作品である鳥類化したエイハブやイシュメールたち、そして『白鯨』内に見られる鳥はクラウバの『白鯨』の世界観を巧みに表現している。¹ 鳥類化したスタップが鯨を食べている場面を描いた作品『スタップ』(2003) を描いたきっかけは、自宅の庭で鷹が頭のない鳥の死骸を食べているを光景みたことであると、クラウバはインタビューで語っている。彼はそれが気味の悪いものだったというが、それが好きだとも答えている (Wallace 74)。なるほど、確かにクラウバの『白鯨』をテーマに描かれた作品には、どこかその気味の悪さが現れているのである。しかし、クラウバは鳥と『白鯨』を組み合わせ、彼独自の『白鯨』を描き出しているが、その鳥たちが作品において、どのような役割を持ち、どのような影響を与えているかということについて彼は言及していない。

『白鯨』に見られる鳥たちに注目しているのは、クラウバだけではない。モーリーン・K・グリフィン (Maureen K. Griffin) は、『白鯨』内に登場する “sky-hawk” や “sea-hawk”、“foul” などの鳥たちを分析している。グリフィンは鳥が描かれる各場面をそれぞれ考察しているが、その分析は十分とは言えない。またクラウバの作品にあるように、『白鯨』の登場人物たちが鳥のイメージと重なっていく点も、その論文では扱われていない。グリフィンは “sea-hawk” が『白鯨』のクライマックスへの前兆であると、そして “sky-hawk” がこの小説の鳥のイメージを反響し、まとめていると指摘している (20)。だが『白鯨』に見られる鳥たちの役割は、グリフィンの指摘している役割のみなのであろうか。

グリフィンの論文やクラウバの作品から、『白鯨』と鳥が深い関係性を持っていることは明確である。しかしその鳥たちやイメージを詳細に分析し、作品内でそれらがどのように作用しているかに関する研究は今までほとんど進められていない。『白鯨』に見られる鳥とそのイメージを細かく分析し、それらがこの作品内でどのような役割を担っているのかを明らかにすることが本論の目的である。

1. 『白鯨』に見られる鳥

『白鯨』の情景描写に注目してみると、鳥が多く描かれている。最初に、第14章「ナンターケット」に描かれる鳥の存在に目が留まる。

In olden times *an eagle* swooped down upon the New England coast, and carried off an infant Indian in his talons. With loud lament the parents saw their child borne out of sight over the wide waters. They resolved to follow in the same direction. Setting out in their canoes, after a perilous passage they discovered the island, and there they found an empty ivory casket, — the poor little Indian's skeleton.² (73)

語り手イシュメールは、アメリカの捕鯨産業の拠点ナンターケット島に先住民たちが住み着いた伝説を物語る。ある先住民夫婦の赤ん坊を、一匹の「鷲 (eagle)」が連れ去ってしまう。両親たちは子供を探しに行くが、彼らがある島で発見したものはその子の亡骸であった。イシュメールが語るナンターケットのこの伝説では、鷲は先住民の赤ん坊に悲惨な結末をもたらした鳥だ。『白鯨』における鳥の登場が、赤子の残酷な死と共に始まる点は見落とすことはできない。先住民の赤ん坊の死と鳥という組み合わせは、最後の場面での先住民タシュテゴが“sky-hawk”という鳥とともに沈んでいく場面を我々に連想させる。

「鷲 (eagle)」や「鷹 (hawk)」はこの作品内で、頻繁に目にする。³ それらは本来、強さや若さ、速さの象徴であり高貴なイメージを持つ鳥だ。⁴ しかし、『白鯨』内ではむしろ鷹や鷲が持つ残忍さや凶暴さのみが強調されている。ところで、その鳥たちはシェイクスピア作品内でも多く見られる。⁵ チャールズ・オールソン (Charles Olson) が指摘しているように、シェイクスピア作品は『白鯨』の執筆に深く影響を与えている (47, 66)。メルヴィルがこの作品内に多く鳥を描いたのは、シェイクスピアの影響も関連しているのだろう。まるで伝説ともいえる白鯨との闘いを描くこの小説の冒頭に、先住民と鷲の伝説が描かれている。入れ子構造となっているこの二つの場面は、深く結びついているのだ。

次に注目したいのが、第51章「潮吹き of 霊」だ。ここで、ピークオッド号の乗組員たちは二度も潮吹きを発見する。しかし、追跡してみても、それは姿を消してしまう。そのような不吉な現象が、以下のように描写される。

Close to our bows, strange forms in the water darted hither and thither before us; while thick in our rear flew the inscrutable sea ravens. And every morning,

perched on our stays, rows of *these birds* were seen; and spite of our hootings, for a long time obstinately clung to the *hemp*, as though they deemed our ship some drifting, uninhabited craft; a thing appointed to desolation, and therefore fit roosting-place for their homeless selves. And heaved and heaved, still unrestingly heaved the black sea, as if its vast tides were a conscience; and the great mundane soul were in anguish and remorse for the long sin and suffering it had bred. (215)

「海ガラス (sea-ravens)」の群れが、船の周りを飛び交う。船が荒波に揺られて進む中、海ガラスが船の「麻縄 (hemp)」に止まり、船員たちが追い払ってもそこから離れることはない。姿を消してしまう不吉な潮吹きを二度も見たピークオッド号の乗組員たちは、嵐の中を無言で進む。先ほど確認した第 14 章と同様に、不吉で陰鬱な雰囲気と鳥と共に表現されているのだ。海ガラスたちが止まっている「麻縄 (hemp)」も、拝火教徒フェデラーのエイハブへの予言、“Hemp only can kill thee.” (437) を彷彿とさせる。最後にはピークオッド号の船長エイハブは、まるで絞首刑に処される罪人の如く、麻縄に首を絞められて死んでいく。つまり、フェデラーによる死の予言が鳥と共にこの場面で想起されるのである。“sea-raven”からは「カラス (raven)」の黒さを連想させ、不吉さが描き出されていると言える。海ガラスの黒さと麻縄の死のイメージは、先ほど確認した先住民の子供の悲惨な物語と重なり合う。この作品内の鳥の存在に、不吉なイメージがつきまとっているのである。

また上の引用の直後は以下のように続く。

Cape of Good Hope, do they call ye? [...] we found ourselves launched into this tormented sea, where guilty beings transformed into *those fowls* and these fish, seemed condemned to swim on everlastingly without any haven in store, or beat that black air without any horizon. (216)

罪深い人間たちは喜望峰にいる「鳥や魚 (those fowls and these fish)」に生まれ変わり、永遠に泳ぎ、黒い空の中を飛び続けるよう運命づけられる。注目すべき点は、「鳥 (fowls)」が「罪深い者たち (guilty beings)」の生まれ変わりと喩えられていることだ。荒れた海の上に見られる不吉な鳥たちは罪人の生まれ変わりであり、その鳥たちはこの場面で、ピークオッド号の麻縄にとまっている。麻縄は絞首刑のイメージを彷彿とさせることに上で触れたが、その上に罪人の生まれ変わりである海ガラスたちが留まっている点は見過ご

せない。

第 69 章「葬式」では、鯨の死体に群がる「鳥 (fowls)」が描かれる。死体は「皮を剥がれ、頭を切断された白い身体は大理石の墓のように輝く (The peeled white body of the beheaded whale flashes like a marble sepulchre)」(279)。前述した麻縄と絞首刑のように、「皮を剥がされた (peeled)」や「頭を切断された (beheaded)」の語からは、皮剥の刑や斬首刑のイメージが想起される。イシュメールはその光景に対して “Oh, horrible vultureism of earth!” (279) と嘆き、死んだ鯨に群がる「海のハゲワシ (sea-vultures)」たちを「空中のサメ (air-sharks)」に喩える。ハゲワシもサメも鯨の死肉に群がり、その肉を食い漁っていく。この鯨の死体は「大理石の墓 (a marble sepulchre)」と重ねられることにより、ハゲワシやサメの姿はその墓を荒らす墓荒らしを彷彿とさせてくる。鳥や魚たちが罪人の生まれ変わりであるとイシュメールが語るように、この章の鳥やサメたちの中にも、墓を荒らす罪人のイメージが浮かび上がる。さらに、鯨の死体の周りを飛び交う鳥は、第 91 章「ピークオッド号、バラのつぼみ号にあう」でも描かれている。ピークオッド号はあるフランスの捕鯨船が海で野垂れ死んだ鯨をくくりつけているところに遭遇する。その海上では第 69 章と同様に、“vulture” つまり “sea-fowl” がすたれ鯨の上を飛び交っている。ここでも、死体を漁る墓荒らしの鳥を見ることができる。前に見た先住民の赤ん坊の話でも、幼い子供をさらい、殺したのは鷲であった。この小説で、死や罪人のイメージと鳥は深く結びついているのだ。

以上のように、『白鯨』に見られるさまざまな種類の鳥たちは、死や罪人のイメージを伴って登場することが多い。先住民の子供を連れ去って殺した鷲や、死んだ鯨に群がる海鳥たち。死や不吉で不穏なイメージで結びついている点からこの作品内の鳥たちを見ると、第 22 章「メリークリスマス」で、出港したピークオッド号の頭上を飛ぶカモメも、その船の悲惨な運命を予兆しているようにも見えてこよう。

2. 不吉な鳥アルバトロス

鷲や海ガラスといった鳥たちは、死や罪人のイメージと結びついていることを確認した。ここでは、アルバトロスという鳥に注目したい。アルバトロスは白鯨の白さと比較され、またピークオッド号が航海の途中で出会う船の名前の一つでもあることから、この小説の鳥たちを分析するには不可欠な鳥だ。しかし、クラウバやグリフィンはアルバトロスにほとんど注意を向けていないのである。まずアルバトロスの名が最初に見られるのは、第 42 章「鯨の白さ」だ。イシュメールは白という色が持つ崇高さだけでなく、その恐ろしさについて言及する。その語りの中で、彼は白いサメや白熊も例に挙げる “Witness the white bear of the poles, and the white shark of the tropes” (180)。前節で、鳥と共に鯨の死肉

に群がっているサメを我々は目にした。死や罪人のイメージがつきまとう鳥とサメが、この章でも同時に現れる点は、重要な意味を持っていると考えられる。白いサメや白熊の恐ろしさを語った後、イシュメールは白い鳥アルバトロスの名を口にする。

Bethink thee of *the albatross*: whence come those clouds of spiritual wonderment and pale dread, in which that white phantom sails in all imaginations? Not Coleridge first threw that spell; but God's great, flattering laureate, Nature. (180)

ここでコールリッジ (Samuel Taylor Coleridge) の名が言及される理由は言うまでもなく、彼の作品『老水夫行』(*The Rime of the Ancient Mariner*) が連想されているからだ。八木敏雄やディーン・フラワー (Dean Flower) が述べているように、アルバトロスはもともと、船を冰山との衝突などから守る吉兆の鳥であった (Flower 135, 八木 50)。しかしコールリッジの『老水夫行』では、老水夫はアルバトロスを殺してしまい、彼の船は悪夢の航海に耐えねばならなくなる。その悪夢の航海のイメージが、アルバトロス号を終始取り巻く、不穏な雰囲気と重なっている。鯨の白さとアルバトロスの白さを並べることで、白いアルバトロスも白鯨と同様に美しさや崇高さだけでなく、畏怖や恐ろしさを持っていると読み取ることができる。

上の引用の直後にあるメルヴィル自身によって付けられた注釈には、彼が実際にアルバトロスを見たときのことが書かれている。彼はアルバトロスの翼を「大天使の翼 (archangel wings)」と喩える一方で、その鳥の叫びを、「人知を超えた苦しみの中にいる王の亡霊 (some king's ghost in supernatural distress)」(180) の叫びとも重ねている。

“ghost” や “supernatural distress” は、死や地獄を我々に想起させる。それはこれまで確認した鳥と共に描かれる、死や罪人のイメージとも重なり合う。少なくともこの小説で、アルバトロスは吉兆の鳥ではなく、美しくも恐ろしく、不吉な表象として描かれているのだ。

上で見た引用部分にある美しいアルバトロスのイメージとは異なって、第 52 章で会うアルバトロス号は、不吉で陰気なイメージだけを伴っている。

As if the waves had been fullers, this craft was bleached like the skeleton of a stranded walrus. All down her sides, this spectral appearance was traced with long channels of reddened rust, while all her spars and her rigging were like the thick branches of trees furred over with hoar-frost. Only her lower sails were set. A wild sight it was to see her long-bearded look-outs at those three mast-heads.

They seemed clad in the skins of beasts, so torn and bepatched the raiment that had survived nearly four years of cruising. (217)

“this craft was bleached like the skeleton of a stranded walrus” という表現にあるように、アルバトロス号の白い部分が、アラザシの骸骨のようであるとイシュメールは語る。前節で確認したように、死や不吉なイメージがこの部分からも感じ取れる。また乗組員たちの服装や顔に関して、“A wild sight” と述べられている点も注目に値する。このアルバトロス号のイメージはまさに、コールリッジの『老水夫行』のものと同じだ。吉兆の鳥アルバトロスを殺し、悪夢のような航海の途中にいる船とその船員たちは、この章で見られる不穏で不吉なアルバトロス号とその船員たちと重なる。またピークオッド号がこの船と出会ったことで二つの不吉な出来事が起こっていると、エドワード・ストーン (Edward Stone) が指摘している (175)。一つ目は白鯨の名前を出した途端、アルバトロス号の船長がメガホンを落としてしまうこと。もう一つは、ピークオッド号のそばを泳いでいた小魚たちが逃げていくことだ。アルバトロス号という鳥の名が付けられたこの章全体は、陰気で不吉な雰囲気や死や罪人のイメージで覆われているのである。

それだけではない。エドワード・H・ローゼンベリー (Edward H. Rosenberry) は、アルバトロス号の幽霊のような乗組員たちがピークオッド号とコミュニケーションをとることができないと指摘している (166)。第 79 章「大草原」で、イシュメールは鯨の天才性について語る。そこで彼は、鯨は物を書くことも話すこともできないが、その沈黙があるために天才であり偉大であると言う。作品の中でも鯨は、「ものいえぬ怪物 (Dumb brute)」と繰り返し呼ばれる。さらに美しさと不吉さ、アルバトロスにはその二つの両義的なイメージがあると八木やマイケル・C・バートホールド (Michael C. Berthold) は指摘している (八木 50, Berthold 145)。その二つの点において、アルバトロスと白鯨は共通点を持っている。幸運をもたらす美しい鳥アルバトロスに白鯨との共通点を持たせることで、アルバトロスには美しい点だけでなく、白鯨のように脅威や恐ろしさも伴っていることを強調しているのである。

また第 123 章「マスケット銃」にも、アルバトロスの名が見られる。この章の冒頭では、台風が猛威を振るい、羅針盤の針も狂ったように回転している。その数時間後、台風に流されたトップスルの切れ端が風下に流されていく様子が、“like the feathers of an albatross (449)” とアルバトロスの羽に喩えられる。荒れた天気の中で、再びアルバトロスの名が見られる点は極めて重要である。アルバトロスの羽が嵐の中で吹き飛ばされている描写は、元来その鳥に付属する幸運や美しさのイメージとは異なる。むしろ、上で確認したような陰鬱な雰囲気が、この場面のアルバトロスの羽にも伴っていることが分かる。

というのもこの章は、一等航海士スターバックがエイハブをマスカット銃で殺すべきか苦悩する姿が描かれるところだ。アルバトロスの名を出すことによって、スターバックの葛藤という不穏で陰鬱な場面を予兆しているのである。

以上のように、この作品のアルバトロスは、幸運を示す美しい鳥として描かれてはいない。むしろこの作品内に見られる他の鳥のように、不吉で陰鬱な雰囲気や死や罪人のイメージが伴っている。シェイクスピア作品の海は幸運と悲劇という両義的なイメージを持っているとウィルソン・ナイト (G. Wilson Knight) は指摘している (51)。美しい海にも、恐ろしい一面があるように、メルヴィルは美しいアルバトロスに畏怖の表象を付け加えたのだ。

3. 襲い掛かる鳥たち

海上を飛び回る鳥たちやアルバトロスといった不吉なイメージを持つ鳥たちの存在は、物語の終盤、白鯨の登場が近づくにつれて際立ってくる。第 130 章「帽子」がその例の一つだ。白鯨との闘いが目前に迫ったエイハブの周りを、一羽の「トウゾクカモメ (sea-hawk)」が飛び回る。そのトウゾクカモメは、エイハブの帽子を奪い去っていく。そこでイシュメールは、古代ローマの皇帝タルキニウスの伝説を引き合いに出す。それはタルキニウスの帽子が三度とも鷲に奪われたが三度とも返ってきた後、彼がローマの皇帝になったという伝説だ。しかし、エイハブの帽子は二度と返ってくることはない。ここで“eagle”や“wild hawk”などの鳥が見られる点は見落とすことはできない。鷹によってタルキニウスの帽子を取られたという伝説は、実際は吉兆を示すが、エイハブに関しては逆に不幸の前兆として用いられている。それは、先ほど確認したアルバトロスの両義的な部分を思い起こさせる。アルバトロスも、元々は船にとって幸運を示す鳥であった。コーレルリッジの『老水夫行』のイメージからアルバトロス号には不吉なイメージが伴い、他の場面のアルバトロスも幸運のイメージからはかけ離れている。トウゾクカモメによってエイハブの帽子が奪われるこの場面は、これから始まる白鯨との闘いの悲惨さとこの物語の最期を予兆していると解釈できる。

さらに、第 132 章「交響楽」を見てみよう。この章の冒頭では空と海が対比されるが、その中で鳥の姿が見られる。

Hither, and thither, on high, glided *the snow-white wings of small, unspckled birds*; these were the gentle thoughts of the feminine air; but to and fro in the deeps, far down in the bottomless blue, rushed mighty leviathans, sword-fish, and sharks; and these were the strong, troubled, murderous thinkings of the

masculine sea. (474)

女性的な空と男性的な海を比較する一方で、空の穏やかさと海の残酷さも対比されている。ここで注目してもらいたい点は、「小さく穢れのない鳥の、雪のように白い翼 (the snow-white wings of small, unspckled birds)」だ。この「雪のように白い羽の鳥」に対して、我々は一見無垢で穏やかなイメージをこの鳥に抱くかもしれない。しかしその直前にある“glided”からは蛇のイメージ、またその鳥の雪のような白さは白鯨のイメージを想起させるとハロルド・ビーヴァー (Harold Beaver) は注釈をつけている (949)。「巨大なレヴィアタン (mighty leviathans)」や「サメ (sharks)」も見落とすことはできない。鯨の死肉にサメと鳥が群がっていた場面は、先ほど確認した。第 41 章では、白いサメや白いアルバトロスは鯨の白さと共に称えられていた。恐怖と美しさを併せ持つこの 3 つが、ここで同時に見られる点は注目に値する。空と海が溶け合うこの章では、空の穏やかさも海の残酷さも表裏一体なのだ。そして海のサメや鯨、空の鳥たちも重なり合う。つまり、美しさや穏やかさを感じさせるこの「雪のように白い翼の鳥」も、目前に迫った白鯨との闘いの悲惨さを導く恐ろしさを伴っているのである。

ついに白鯨と対面し最後の戦いが始まると、戦う両者の周りに鳥たちが姿を現す。

But these were broken again by the light toes of hundreds of *gay fowl* softly feathering the sea, alternate with their fitful flight; and like to some flag-staff rising from the painted hull of an argosy, the tall but shattered pole of a recent lance projected from the white whale's back; and at intervals one of the cloud of *soft-toed fowls* hovering, and to and fro skimming like a canopy over the fish, silently *perched* and rocked on this pole, the long tail feathers streaming like pennons. (479-80)

白鯨がとうとう姿を現し始め、その場に緊張が張り詰める一方で、そのムードとは対照的な「陽気な鳥たち (*gay fowl*)」が何百も海面の周りを飛び交う。またさらに、そのうちの一只が、白鯨の背中に刺さっている竿にとまる。白鯨の登場に合わせて、動きが活発になっていた白い鳥たち。しかし白鯨が水の中に姿を隠すと、その鳥たちの動きにも変化が生じる。鳥たちは白鯨がいた海の上で羽ばたいたり、止まったりし始める。また白鯨の周りを飛び交うこの鳥たちが、まるで白鯨のように白い色をしていることが“*Hoveringly halting, and dipping on the wing, the white sea-fowls longingly lingered over the agitated pool that he left*” (480) の描写からも窺える。第 132 章「交響楽」について、ビーヴァーが「雪のように白い羽の鳥」が白鯨を連想させると指摘していることには先ほ

ど触れた。アルバトロスの白さが白鯨の白さと結びつけられているように、白鯨と白い海鳥たちの姿が結び付く。第 132 章「交響楽」では海と空が重なり、そしてこの場面の鳥たちの白さと白鯨の白さも互いに響き合っているのだ。

その後、白鯨と鳥たちの恐ろしさも重なる。白い鳥たちはエイハブのボートに向かって激しく飛んでいき、襲い掛かってくる。

“The birds!—the birds!” cried Tashtego.

In long Indian file, as when herons take wing, the white birds were now all flying towards Ahab's boat; and when within a few yards began fluttering over the water there, wheeling round and round, with joyous, expectant cries. (480)

この引用部分の「白い鳥たち (white-birds)」も、先ほど見た「陽気な鳥たち (gay fowl)」と同様に、「楽しげで、期待を込めた鳴き声 (with joyous, expectant cries)」を上げる。この緊迫した雰囲気には似つかわしくない鳥たちの行動が、気味の悪さを醸し出している。白鯨が登場する場面の鳥たちを見てみると、今までは陰鬱なイメージを伴っていた鳥たちが活発に、陽気になっていくことに気づく。命懸けの最後の決戦において、鳥たちの陽気な姿は不気味であり、その鳥たちは白鯨に無謀にも挑んでいくピークオッド号の乗組員たちをあざ笑う。

フェデラーがいなくなった後、彼による予言の謎にエイハブは頭を悩ませ、「鷹のくちばしのように、俺の脳をついばむ (like a hawk's beak it pecks my brain)」(490) と口にする。エイハブのこの言葉から、彼に襲い掛かる鷹の姿が見えてくる。ルーサー・S・マンフィールド (Luther S. Mansfield) は、この場面のエイハブがプロメテウスと重ねられていると指摘している (719)。確かに以下の引用のように第 44 章「海図」では、エイハブとプロメテウスが一致している。

God help thee, old man, my thoughts have created a creature in thee; and he whose intense thinking thus makes him a Prometheus; a vulture feeds upon that heart for ever; that vulture the very creature he creates. (191)

プロメテウスとは、ギリシア神話に登場する巨人タイタンの一人だが、天から火を盗んで人間に与えたため、ゼウスによって岩に縛り付けられ毎日ハゲワシに肝臓をついばまれる罰を受ける。酒本雅之も、激しい稲妻にも立ち向かうエイハブの姿がプロメテウスと重なると指摘している (234)。鳥たちに罪人のイメージが付きまとっていることは先に触れた。

ここでも、鳥と罪人はプロメテウスを通して結びついているのである。⁶

さらに、第 135 章「追跡 3 日目」に注目したい。白鯨との最後の戦いの準備が進められる。ボートが下ろされ、エイハブがそこに乗り込もうとしたとき、多数のサメが襲ってくる。その時エイハブのボートに襲い掛かるサメたちは、鷹に喩えられる “in the same prescient way that vultures hover over the banners of marching regiments in the east.” (494)。先ほど見た第 132 章「交響曲」で鳥と重なり合っていた無数のサメたちが、鳥たちに呼応し、エイハブたちを襲っているように見える。またそこに追い打ちをかけてくるかのように、“hawk” も襲い掛かる。ついには、その鷹はピークオッド号の象徴ともいえる「赤い旗 (the red flag)」をついばみ、攫って行くのだ。

以上のように、この作品に見られる様々な鳥たちが、死や不吉なイメージを持ち、また白鯨との戦いにおいては、白鯨と呼応する描写が見られる。さらには、エイハブたちに襲い掛かる。ここに至るまで、この物語にある不穏な雰囲気を作り出していた鳥たちが、最終場面でついに登場人物たちに襲い掛かっていくのである。

4. 鳥と重なる乗組員たち

ピークオッド号の船員たちに、鳥のイメージが重なっている描写も数多くある。その一つは、これまで何度も触れてきた第 52 章のアルバトロス号での場面だ。

South-Eastward from the Cape, off the distant Crozetts, a good cruising ground for Right Whalemens, a sail loomed ahead, the Goney (Albatross) by name. As she slowly drew nigh, from *my lofty perch* at the fore-mast-head, I had a good view of that sight so remarkable to tyro in the far ocean fisheries—a whaler at sea, and long absent from home. (217)

イシュメールは「止まり木 (perch)」にいる。つまりイシュメールはマストヘッドの高いところからこの光景を見ているのだが、*OED* によると、この “perch” の語には “A horizontal bar provided as a resting place for a hawk, domestic fowl, or tame bird” や “Anything on which a bird alights, rests, or roosts” のように、鳥が止まる木や棒の意味がある。その「止まり木 (perch)」という語から、鳥を連想することは容易である。⁷ アルバトロスという名の船が登場するにもかかわらず、この章には鳥が一匹も現れることはない。しかし、イシュメールが「止まり木 (perch)」にたたずんでいる点は見落としてはいけない。先ほど確認したように、この直前の章である「潮吹き of 霊」では、多くの海ガラスが麻縄の上にとまっていた。この海ガラスたちもまた “perch” の上にとまり、嵐の

中のピークオッド号を見下ろしている。同じく、この章のイシュメールも“perch”に座り、不吉な船アルバトロス号を見下ろす。その姿はまさに不吉な鳥と重なる。メルヴィルはこの“perch”の語を用いることで、登場人物に鳥の姿を重ねているのだ。⁸

黒人の少年ピップも鳥と化す。第 99 章「ダブロン金貨」を見てみよう。この章ではマストに釘付けにされた金貨を見ながら、エイハブやスターバック、スタップらが順番に独り言を口にしていく。最後に現れるのが黒人の少年ピップだ。彼は鯨の追跡中、海に一人置き去りにされ、気がふれてしまう。狂人ピップはダブロン金貨の前にやってくると、“I’m a crow, especially when I stand a’ top of this pine tree here. Caw! caw! caw! caw! caw! caw! Ain’t I a crow? (384)”と、カラスの真似をし始める。狂人ピップが黒く不吉なカラスに重ねられる点は、これまで見てきた不吉な鳥たちのイメージとも一致する。海に一人見捨てられ、真理を見てしまったピップは不吉な予兆を告げるカラスと重なり、ピークオッド号の運命を見ているのである。

また 126 章「救命ブイ」で、ある夜ピークオッド号の船員たちは奇妙な絶叫を聞く。エイハブはそれをアザラシの鳴き声に違いないと説明するのだが、この不吉な出来事は一人の船員の死を予兆することになる。

But the bodings of the crew were destined to receive a most plausible confirmation in the fate of one of their number the morning. At sun-rise this man went from his hammock to his mast-head at the fore; and whether it was that he was not yet half waked from his sleep (for sailors sometimes go aloft in a transition state), whether it was thus with the man, there is now no telling; but, be that as it may, he had not been long *at his perch*, when a cry was heard—a cry and a rushing—and looking up, they saw a falling phantom in the air; and looking down, a little tossed heap of white bubbles in the blue of the sea. (458-59)

ここでも“perch”が用いられている。先ほどのイシュメールの場合と同じく、名もないその男は鳥のように「止まり木 (perch)」の上に立ち、そしてそこから飛び降りてしまう。その後、救命ブイが投げ込まれるが、彼が再び浮かび上がってくることはない。ここでも、“perch”から連想される鳥のイメージは、ピークオッド号の船員に重ねられ、一人の男の死という不吉な出来事に接続する。

鳥のイメージは、エイハブにも見られる。先ほど確認した第 130 章「帽子」では、トウゾクカモメによってエイハブの帽子が奪われ、不吉な予兆を表していた。だがその時、エイハブ自身も「止まり木 (perch)」に立っているのである。彼自身が鳥のように「止まり

木 (perch)」に立っているときに、鳥に帽子を奪われている点は、鳥が不吉な予兆と強く結びついていることをはっきりと示しているのだ。

さらに明示的に、エイハブと鳥が重ねられる場面がある。それは、白鯨との闘いが始まる第 133 章「追跡一日目」だ。この作品に登場する鳥たちが、白鯨との戦いにおいてより活発になっている点は先に論じたとおりだ。しかしそれに伴いこの戦いの場面では、より明確にエイハブと鳥が重ねられている。

All sail being set, he now cast loose the life-line, reserved for swaying him to the main royal-mast head; and in a few moments they were hoisting him thither, when, while but two thirds of the way aloft, and while peering ahead through the horizontal vacancy between the main-top-sail and top-gallant-sail, *he raised a gull-like cry in the air*, “There she blows!—there she blows! A hump like a snow-hill! It is Moby Dick!” Fired by the cry which seemed simultaneously taken up by the three look-outs, the men on deck rushed to the rigging to behold the famous whale they had so long been pursuing. Ahab had now gained *his final perch*, some feet above the other look-outs (478-79)

ついに白鯨と対面するこの場面で、エイハブは興奮し、「空中でカモメのような声 (a gull-like cry in the air)」を上げる。そしてさらには他の見張りたちよりも高い「最後の止まり木 (his final perch)」に登る。白鯨との闘いを迎え、不吉で悲惨な予兆がピークに達したとき、エイハブは不吉なイメージを持つ鳥たちと一体化する。その後白鯨を見失ったエイハブは、再び自分を “perch” に吊り上げるように命じる。

鳥と重ねられるのは登場人物たちだけではない。同じ章で、ピークオッド号自体も、鳥に喩えられている。白鯨を見失ったピークオッド号は、本船自ら白鯨を追跡する。その姿がここでは、「アルバトロスの二重に繋がれた翼のように (like the double-jointed wings of an albatross)」(483) と喩えられる。不吉さと美しさの両義性を持つ鳥アルバトロスの比喩を通じて、ピークオッド号が描写される点は注目に値する。第 41 章では、白鯨の白さと並ぶほど称赞されていたアルバトロスが、ここでは白鯨を追いかける。クラウバの作品にあるように、エイハブをはじめとするピークオッド号の船員たちが鳥のイメージを持つようになってきた点を、ここまで確認してきた。しかし、最終的に彼らの船ピークオッド号までもが不吉なイメージを持つアルバトロスに喩えられ、白鯨を追っていく。それはこの物語の最後を予兆していると考えられる。かくして、不吉な鳥に憑りつかれた船員とその船は、悲惨な結末へと急いでいくのである。

終わりに

『白鯨』に登場する鳥たちは死や不吉なイメージを伴うことが多い。特にアルバトロスという鳥は、白鯨と同じように、美しい白さと恐怖や不吉さの両義的な表象であることが窺える。また作品内の鳥たちは、白鯨の登場と共に活発になっていく。鳥たちは白鯨と呼応し、ピークオッド号に襲い掛かってくる。それだけでなく、鳥たちはピークオッド号の船員たちにも重ねられる。不穏な雰囲気を漂わせるアルバトロス号に出会うとき、イシュメールはまるで鳥のように船の「止まり木 (perch)」の上でその様子を伺う。またピークオッド号の船員たちが気味の悪い叫びを聞いた後、ある名もなき乗組員は、その「止まり木 (perch)」から飛び降り、二度と浮かび上がってくることはない。そしてエイハブはずっと追い求めていた白鯨を見つけると、カモメのように叫び、「止まり木 (perch)」に登っていく。最後にはピークオッド号自体も、不吉さと美しさを持つアルバトロスに喩えられ、白鯨を追いかける。

そしてこの船の運命も、一羽の鳥と共に終わりを迎えるのであった。

A sky-hawk that tauntingly had followed the main-truck downwards from its natural home among the stars, pecking at the flag, and incommoding Tashtego there; this bird now chanced to intercept its broad fluttering wing between the hammer and the wood[...] and so the bird of heaven, with archangelic shrieks, and his imperial beak thrust upwards, and his whole captive form folded in the flag of Ahab, went down with his ship, which, like Satan, would not sink to hell till she had dragged a living part of heaven along with her, and helmeted herself with it. (499)

このトウゾクカモメはアメリカ合衆国を表しており、タシュテゴが打ちつける赤い旗は、彼の赤い腕と同様に、先住民を隠喩していると大島由起子は指摘している (121)。さらに、トウゾクカモメに関して「赤いくちばしを持つ獐猛なトウゾクカモメ (red-billed savage sea-hawks)」(470) と表現されている。トウゾクカモメの赤いくちばしからは、先住民たちの赤い肌を連想することができる。この物語の序盤にイシュメールに語られた先住民の赤ん坊の伝説や最後のタシュテゴと“sky-hawk”のように、ここでも先住民のイメージと鳥の姿が重なっている。ピークオッド号は絶滅した先住民の部族の名であることから、先住民の運命とここまで見てきた鳥が持つ不吉なイメージは結びつく。この場面で、先住民を表すピークオッド号の赤い旗と、今まで船の周りを飛び交い襲いかかり、そして船員や船自体と一体化していった不吉な鳥たちは、ピークオッド号とともに沈んでいくことで、

その予兆の実現を示しているのだ。

グリフィンは、『白鯨』の鳥たちの役割がクライマックスの前兆であると指摘している。しかし、それだけではない。高山宏は、『白鯨』の物語内に存在するさまざまな円環に触れている (221-63)。⁹ 確かに、「孤児」の意味を持つ名のイシュメールの語りから始まり、レイチェル号によって、孤児としてイシュメールは見つけ出される。またエイハブが白鯨に足を食いちぎられたのも日本沖であり、彼が海に沈むのも日本沖である。このような円環の中に、これまで見た鳥のイメージも含まれるのである。先住民の子供の亡骸から、鳥のイメージが始まり、先住民であるタシュテゴとともに鳥と旗が沈んでいく。鳥と先住民の伝説に始まり、鳥と先住民の伝説に終わる。罪や罪人のイメージと結びついていた鳥たちは、白鯨に戦いを挑む船員たちの罪と考えられる。ピークオッド号の罪と悲惨な最期を示すものが、『白鯨』の中に描かれる鳥たちだ。エピローグでは、“sea-hawk” たちが今まで激しく船を襲っていた様子とは打って変わって、大人しく空を舞っている。その姿は、ピークオッド号の終わりを見届けた鳥たちが罪や不吉なイメージから解放されたことを表している。悲劇を見届けた“sea-hawk” は、静かに空を静かに飛び交い、再びナンターケットに帰っていくのである。

Notes

- 1 クラウバの作品はロングマン版『白鯨』(2007)の表紙にも使用されている。
- 2 本稿での『白鯨』の引用はすべて John Bryant と Haskell Springer 編による *Moby-Dick* (2007) の版に拠っている。また *italics* はすべて筆者による。
- 3 鷹と鷲はその大きさに区別される。小型や中型のものは鷹、大型のものは鷲と呼ばれている。したがって、本稿においては鷹も鷲も同一のものとして論じる。
- 4 アト・ド・フリース (Ad de Vries) によると、鷹や鷲には凶暴さや残酷なイメージを持っているが、王者の権力や、崇高さなどが比較的多い (152-54, 240-41)。
- 5 シェイクスピア作品に見られる鳥を分析しているジェイムズ・E・ハーティング (James Edmund Harting) は、シェイクスピアは鷹狩りを好み、鳥に非常に詳しくたと指摘している。シェイクスピアは鷹や鷲を吉兆の鳥として描いていることが多かった (2, 27)。
- 6 『タイタス・アンドロニカス』や『マクベス』の中で、内臓をついばむハゲタカについての言及がみられる。ハーティングは、このイメージが罪の意識を示していると指摘している (40, 41)。
- 7 “perch.” (*OED*, n¹, 6. a) A horizontal bar provided as a resting place for a hawk, domestic fowl, or tame bird. (*OED*, n¹, 6. b) Anything on which a bird alights, rests, or roosts.
- 8 “perch”の語は、*OED* やダン・バーチークイック (Dan Beachy-Quick) の *A Whaler's Dictionary* (2008) にも捕鯨用語としての記載はない。
- 9 チャールズ・ファイドルセン (Charles Feidelson Jr) は、『タイピー』(*Typee*) の中に見られる円環のイメージを分析している (164-66)。

Works Cited

- Beachy-Quick, Dan. *A Whaler's Dictionary*. Milkweed Editions, 2008.
- Berthold, Michael C. "Moby-Dick and American Slave Narrative." *The Massachusetts Review*, vol. 35, no. 1, Spring, 1994, pp. 135-48.
- Feidelson Jr, Charles. *Symbolism and American Literature*. The University of Chicago Press, 1953.
- Flower, Dean. "Vengeance on a Dumb Brute, Ahab? An Environmentalist Reading of "Moby-Dick"." *The Hudson Review*, vol. 66, no. 1, Spring, 2013, pp. 135-52.
- Griffin, Maureen K. "The Ship and the Sky Hawk: The Bird Image in Herman Melville's *Moby-Dick*." *Kawasaki Journal of Medical Welfare*, vol. 3, no.1, 1997, pp. 19-21
- Harting, James. E. *The Ornithology of Shakespeare: Critically Examined, Explained and Illustrated*. Gresham Books, 1978.
- Irey, Eugene F. *A Concordance to Herman Melville's Moby-Dick*. Vols. 1-2. Garland Publishing, 1982.
- Klauba, George. "Moby-Dick." *George Klauba*. <https://georgeklauba.com/home.html>. Accessed 6 September 2018.
- Knight, G. Wilson. *The Shakespearian Tempest With a Chart of Shakespeare's Dramatic Universe*. Methuen & Co, 1932.
- Melville, Harman. *Moby-Dick; or, The Whale*. 1851. Edited by Harold Beaver. Penguin, 1986.
- . *Moby-Dick; or, The Whale*. 1851. Edited by Hershel Parker and Harrison Hayford. Northwestern UP, 2003.
- . *Moby-Dick*. 1851. Edited by John Bryant and Haskell Springer. Pearson Longman, 2007.
- . *Moby-Dick; or, The Whale*. 1851. Edited by Luther S. Mansfield and Howard P. Vincent. Hendricks House, 1962.
- Olson, Charles. *Call Me Ishmael*. City Lights Books, 1947.
- Rosenberry, Edward H. "Moby-Dick: Epic Romance." *College Literature*, vol. 2, no. 3, Fall, The Johns Hopkins University Press, 1975, pp. 155-70.
- Stone, Edward. "The Function of the Gams in *Moby-Dick*." *College Literature*, vol. 2, no. 3, Fall, The Johns Hopkins University Press, 1975, pp. 171-81.
- Vries, Ad de. *Dictionary of Symbols and Imagery*. North-Holland Publishing, 1974.
- Wallace, Robert K. Birds, Carnage, Salvation: An Interview with George Klauba. *Leviathan*, vol. 12, issue 2, June, 2010.
- 大島由起子. 『メルヴィル文学に潜む先住民 — 復讐の連鎖か福音か —』. 彩流社, 2017.
- 酒本 雅之. 『沙漠の海 — メルヴィルを読む』. 研究社, 1985.
- 高山 宏. 『アリス狩り』. 青土社, 2008.
- 八木 敏雄. 『「白鯨」解体』. 研究社, 1986.

Summary

This paper examines the role of birds in Herman Melville's *Moby-Dick* (1851). Birds have inauspicious connotations in the novel, especially the albatross which is depicted as a bringer of sorrow despite its traditional reputation as a bird of both beauty and good fortune.

Birds attack the crew of the Pequod in the battle against the white whale, leading Ishmael, Ahab and the others to associate them with bad fortune. Moreover, Ismael stands in his perch like a bird, Ahab also cries like a bird, and even the Pequod is said to chase after the Moby-Dick like an albatross.

In the first half of *Moby-Dick*, Ishmael recounts a folktale in which an eagle carries off and kills an indigenous baby, and in the final scene, the Pequod sinks with the native Tashtego and a "sky-hawk". This is one example of the symmetrical balance, or circularity of the novel, and indicates that birds are included also in the structural circle that comprises the novel.